

名家書簡披展 （連載その二）

雅俗の会

<https://doi.org/10.15017/4784002>

出版情報：雅俗. 2, pp.190-207, 1995-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



名家書簡披展

連載 その二

雅俗の会

本号は、中野三敏氏御所蔵の後藤松陰書簡を掲載する。ここに掲げたものは、本誌記載の書簡番号順に、一巻として軸装されている。

後藤松陰は大坂の儒者で、寛政九年正月八日、美濃に生まれた。名は機、字は世張、通称俊（春）蔵といい、別号に春草・鎌山・兼山等がある。初め菱田毅斎に学び、後に大坂に出、頼山陽に学ぶ。文政八年五月、山陽の媒酌により篠崎小竹の長女まちを娶ると同時に、梶木町に居を構え、そこで講筵を張った。著作に『春草詩抄』、『松陰詩稿』等がある。元治元年十月十九日没、享年六十八歳。大阪市北区与力町天徳寺に、篠崎三島、同小竹等のものと共にその墓碑がある。

なお、松陰の纏まった伝としては、木崎好尚『篠崎小

竹』附載の小伝が、現在最も詳しい。

書簡翻字の原則は、本誌創刊号の凡例に従う。

ただし、本号掲載の書簡中、一～八までの書簡は、戸田睡翁宛書簡であるので、睡翁については、書簡一にのみ注を施した。

また、見せ消ちは原則として翻字しない方針であるが、二と九の書簡には、詩稿を推敲した跡が見られるため、この部分は見せ消ちを生かした。

一

謹復本月七日華東同既望到手蓋河新致之薰手忙手捧披仍

審時下星寒執事合堂清寧欣々慰々盛藁一冊仍例刮目一二
妄批聊以答下問之誼焉耳取弃是祈前年承問閒氣二字之義
頃得之於一友人之答。今書以奉答候。曰。閒氣。只是極
贊賢者之稱。或問伊川。量可學否。曰。可。學進則識進。
識進則量進。韓魏公可學否。曰。魏公是閒氣。案伊川亦
惟贊美之評耳。右出書古賀侗庵先生筆記¹云。萬隨時自玉
加餐不莊

後藤機頓首

睡翁戸田明公執事下

十月十八日之夕

郷姪後藤助右衛門へ之一封。仍例奉煩下執事一走。玆
愛之至。千萬推諒々恕。

○夷人之望には何分先ッ交易ガ本意と奉存候左スレハ先
少々之品物之ケ條を立て三年或ハ五年にて一ト休ミと
申様之事面白ナケレハ休メル杯ノ約束を嚴重ニ立定め
て交易を許免スル杯もよろしからん歟と白面書生の鄙
見には奉存候其内舐糠及米と申様之兆あらハ直様干戈
を交ヘルと申様之事ニテハ如何ならん何分只今之様ニ
てハ何之所為か分らずして只内面^{ウツラ}之物入而已内面乾涸

ニ及候得ハ自然之内訃も生セストハイワレヌカト奉存
候其時は外寇と内訃とにてハ不可高枕而眠と奉存候仍
て外夷ハ来ても来いでもそこは我目ニ付けず只々しら
顔して内を堅固ニするは如何内を堅固ニする術は儉約
を主として軍須ニ手支ヘセぬ様と又海岸ニソロリト手
ぬけなき様ニ防守すると二ツなり愚説如此

明公以為如何 此事小生一文をと奉存候得共未成也

註1 『侗庵筆記』（嘉永五年刊）卷下に、「閒氣」の条あり。

「後世閒氣之稱。特以極贊賢者。別自成義。非襲緯書意。
或問伊川量可學否。曰可。學進則量進。如韓魏公可學否。

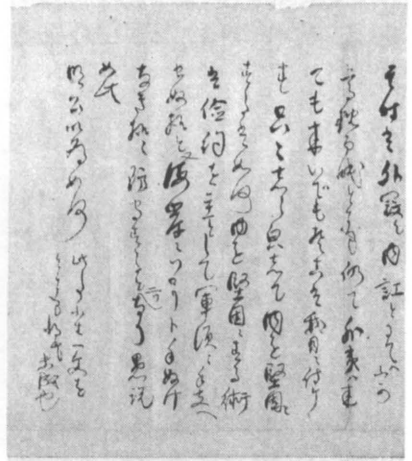
曰。魏公是閒氣。案伊川亦惟贊美之評耳」

2 戸田睡翁。大垣藩家老。名頼及、通称五郎左衛門。初め

敵齋、晩年睡翁と号す。寛政三年生、安政四年四月二十八

日没、六十七歳。

※参考文献・『大垣市史』下



二

即作一首如左

○今晚寅卯之隙ノ

安政歲乙卯。仲冬十二夕。

温々燠更衣趣。遙々近街柝擊。

無月沈星繁概。無風歇夜岑寂。

眩眼知何物。熠燿電光射。

回来僅就枕。殷其南山側。

輾轉高車過。匆匆神器激。

何暇可掩耳。挑燈座正席。

爆々撲屋壁ナトニスルカ

不知霰雹雨。屋瓦爆々々。

求禮与味道。瑞災論懸隔。

吾州謂有冬雷。謂為兆三白。

唯願壓遺蝗。連雲見宿麥。

忽憶去年事。今時地震劇。

震餘猶簸搖。恰如座船隻。

迅雷轉風烈。嘿然誦聖籍。

須臾聞無聲。隣鷄正鼓翼。

昨夜光景如此不知貴地如何

詩中爆字跳韻伏請為僕為一字師也

千萬隨時自玉餘不乙々

仲冬十三日²申牌書

睡翁戸田明公執事後藤機頓首

尚々江戸は道灌以後之大變と申事にて板倉伊豫公よりも昨日地震大火之板刻及寫物⁴十一通被寄賜候書付を見ても愴慘之至ニ存候○明公之御扼腕之通り江戸ハ西洋学館創建ニテ古賀欽一郎殿が館の頭取トヤラ之由果然ラハ欽殿ハ精里先生之孫とも不可謂又白川少将樂翁公ガ精里先生を奨拔セラレシ主意もドコヘカ飛ンデ仕舞只々加増而已を垂涎矜誇スルノカしらず無勿体事ニ候得共可謂太平之極矣乎伏請一読了付之丙丁童也

註1 原簡破れ。

2 詩中「安政歳乙卯。仲冬十二夕」より、本書簡は安政二年十一月十三日の発信。

3 板倉勝明。安中藩主、伊予守。字子赫、甘雨・節山と号す。大坂加番として在坂中、後藤松陰等と交遊した。文化六年十一月十一日生、安政四年四月十日没、四十九歳。

4 安政二年十月二日、江戸とその周辺を襲った大地震の震災状況を記した、一枚摺・見聞誌・錦絵の類。「七日頃より街に霽き、繪草紙屋にて商ふもの數百種」（斉藤月岑

『武江地動之記』、安政二年十一月三日校）。

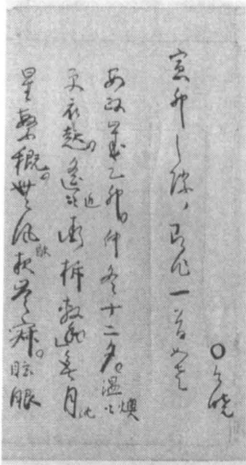
5 洋学所。安政三年正月十一日、蕃書調所と改称して、安政四年正月十八日、正式に開校。

6 古賀茶溪。儒者。名増、字如川、通称謹一郎。別号に謹堂・沙虫。江戸の人。伺候の男。安政二年八月三十日、洋学所頭取となる。文化十二年十一月十一日生、明治十七年十月三十一日没。六十九歳。

7 古賀精里。儒者。名僕、字淳風、通称彌助。別号に復原・穀道。佐賀の人。寛政三年、昌平黌教授となる。寛延三年

十月二十日生、文化十四年五月三日没、六十八歳。

8 松平定信。白河藩主。宝暦十二年十二月二十七日生、文政十二年五月十三日没、七十二歳。



(179×753mm)

此夜多夢出此少寐也此乃
肝火爆字跳脫依所為律當一
字師也

仲冬十二日中牌乙

惟爾戶部以公執事得承統

わうに戸をきき、
板倉伊勢公より、
竹地農士より、板刻及寄物、
十一通より、
性一、
以平、西洋、
一、
欽、
又、
生を、
仕、
訴、
廿、
一、

是水・醉逸とも号す。文化十四年生、明治五年四月十五日没、五十六歳。

2 鴻雪爪。大垣全昌寺（曹洞宗）第二十五世住職。本姓宮地氏。江湖と号す。安芸因島の人。戸田睡翁は檀家の一人。

文化十一年生、明治三十七年六月十五日没、九十一歳。

3 田能村直入。画家。名癡、字願絶。小虎は別号。豊後竹田の人。田能村竹田門。文化十一年生、明治四十年一月二十一日没、九十四歳。

4 菱田毅斎。大垣藩儒。名重明、字伯麗、通称清次。初め合田恒斎、後に皆川淇園門。天明四年生、安政四年二月十三日没、七十四歳。

謹復稍覺春暖申候前日御入京之由客次御多様被遊御入候半与奉欣慰簑笠矮巻題辭被仰付不辭拙劣而仏頭着糞申候且拙作二絶無口之作塗鴉汗電囑申候御笑正奉祈候○鐵心君へ之答書乍悚よろしく下執事へ御命し被下候様奉希上候○御在京中一寸上江拜謁仕度と奉存候候得共衣食於咕嚕不能偷閑辞羞之至奉存候然是亦一世界矣執事其莫笑也○鴻爪師最早御出京と奉存候如何御面晤之節亦復乍悚善致意焉萬隨時自玉加餐不聲所懷草布不乙

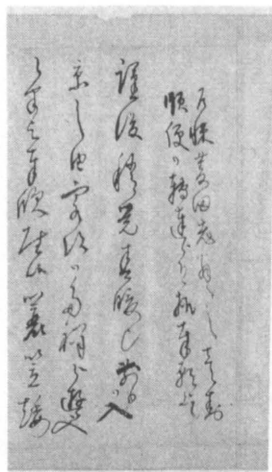
上已後一日

睡翁戸田明公執事後藤機

再拜

矮巻本地画家田能村小虎と申へ頼ミ簑笠杖圖出来申候思召二叶候也是は少々潤筆御遣り被下候様奉願上候無左ては後日小生へ其復讐が参り申候可畏可笑
乍悚菱田老翁へ之老封順便御轉達被下候様奉願上候

註1 小原鐵心。大垣藩城代。名忠寛、字栗卿、通称仁兵衛。



(176×523mm)

上
巳
下

昨有戶部以公執事後燕城

海は南地東南兩能村に陣し
て、我々を以て杖の如くけし
や。是れを以て河津とせり。其
ちこれより舟を以て渡るべし。
渡場がまうじの良可矢

五月望

後藤機頓首

令息主税君へ乍悚乍末よろしく御傳聲被下候様奉瀆候
○鐵心大夫東事竣御帰藩之由奉賀候清拙上人鴻爪禪師か

か 鴻爪禪師₃

御帰山之由安穩奉賀候亦復乍悚御面晤之節御両位へ可
然御轉語奉瀆候○菱田安田両氏へ之弔封ツゝ是亦奉瀆
候狃愛之至悚々息々

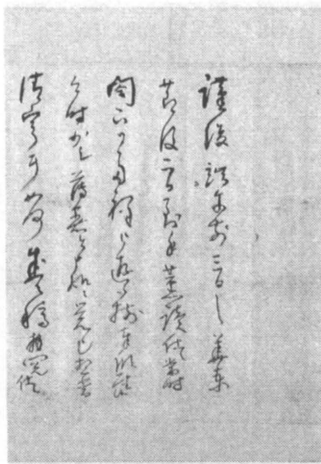
註1 戸田主税。「戸田家系譜」(『大垣市史』中所収)による

と、初名弥三郎、通称五郎左衛門。嘉永三年十二月家督相
続。

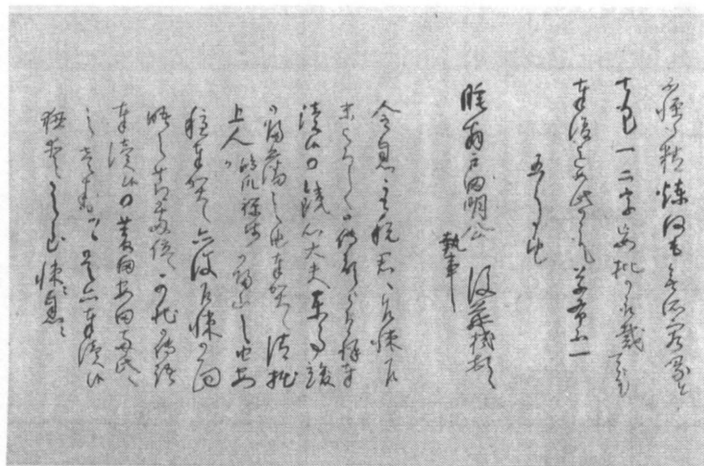
2 本号三註1参照。

3 本号三註2参照。

4 本号三註4の菱田穀斎、もしくは本号六註5の菱田海鷗
か。



(160×470mm)

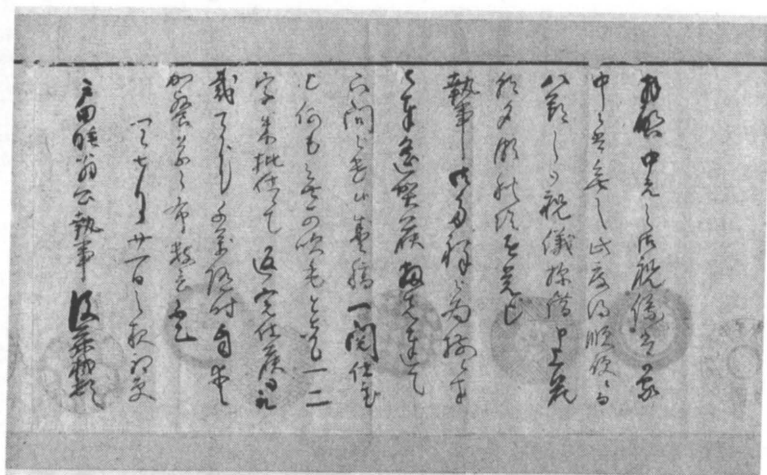


拜啓中元之御祝儀は御家中には無之此度得順便候而八朔
之御祝儀探借申上候朝夕漸秋冷を覚申候執事御多様被為
揃候半と奉遙賀候扱先達て下問被遣候盛稿一閱仕置申候
何も無可吹毛と奉存候一二字朱批仕候て返完仕候御取裁
可被下候千萬隨時自愛加餐草々布数言不乙

閏七月廿一日之夜初更

戸田睡翁公執事 後藤機頼首

註1 閏七月は本簡の前後の書簡の内容から見て安政元年か。



(165×334mm)

六

謹復八朔之御祝儀目出度申納候所賜之華翰閏廿八日¹到手
薰讀仕候仍審當時合堂御多様奉欣慰候今時雨冷不堪稀給
之礼服候貴地ハ如何扱故幣息小竹翁之書束及三島翁之書
翰御所望被遣候所何も面白ものは無御座候只々有合セ之
珍襲仕置候もの二通呈上仕候又二通是等にて御念御霽し
可被下候○前来之盛稿は貴府附近木戸邨之専光寺⁴流念師
来宿帰郷ニ付妄批菱田文藏ニ向ケ托上仕候閏月廿二日朝
也定て今回の御手束と行違ひニ相成候事と奉存候若分り
不申候は、右菱田文藏⁶専光寺御聞合可下候草々布数字以
奉答不莊不謹

八月朔

睡翁戸田明公執事

後藤機頓首

篠崎三嶋同小竹二翁端及杏坪翁⁷大含師⁸二翰奉呈上候凡四
通御笑留可被下候

註1 安政元年七月か。

2 篠崎小竹。儒者。本姓加藤氏。名弼、字承弼。長左衛門
は通称。大坂の人。九歳で篠崎三島に入門、のち養子とな
る。天明元年四月十四日生、嘉永四年五月八日没、七十一
歳。

3 篠崎三嶋。小竹の父。儒者。名應道、字安道、通称長兵
衛。別号郁洲。元文二年生、文化十年十月三十日没、七十
七歳。

4 浄土真宗の寺。現在、岐阜県大垣市木戸町。永延二年創
立（専光寺御示教）。

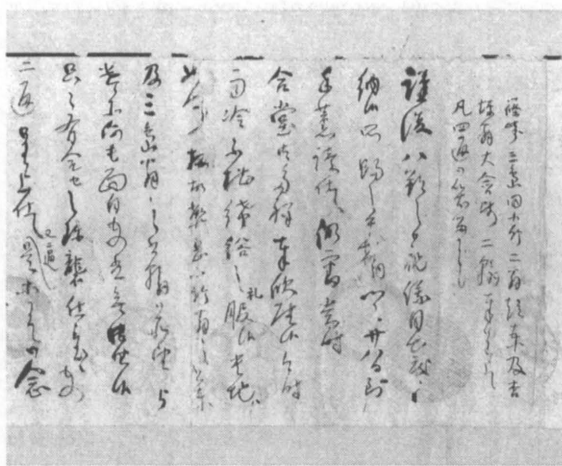
5 第十五世専光寺住職。天保元年生、明治三十八年一月九
日没、七十六歳（専光寺御示教）。

6 菱田海鷗。穀斎の男。大垣藩儒。名重禎、字士瑞、通称
文藏。海鷗は号。美濃の人。天保七年六月生、明治二十八
年三月九日没、六十歳。

7 頼杏坪。広島藩儒。名椎柔、字千棋、別号春草堂。万四
郎は通称。頼春水弟。宝暦六年七月生、天保五年七月二十
二日没、七十九歳。

8 大含。豊前古城正行寺の学僧。豊後の人。本姓末弘。名

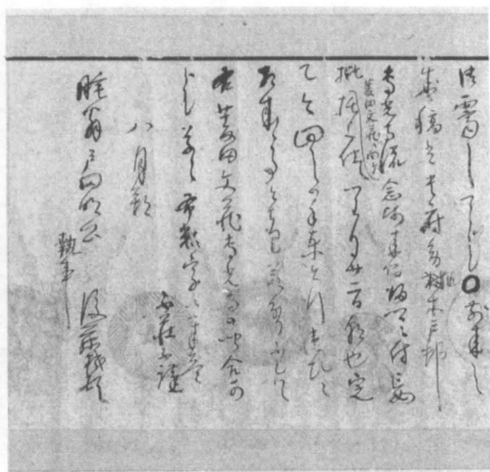
信慶。別号雲華など。書画に長じ、小竹を始めとする京坂の文人と交遊有り。安永二年生、嘉永三年十月九日没、七十八歳（赤松翠陰編『雲華上人遺稿』所収「雲華上人傳」）。



(165×461mm)

七

謹啓時下秋冷に相成申候閣下合堂被為揃御清寧被遊御入候半と奉欣慰候扱瓜月乞巧前一日之華翰同月念二日之華



菊月初四日

下執事 後藤 機 再拜

千里濃東與攝西 百年邱首意寧迷

二句欠明而未得

と仕候得共未穩候故追て練熟之上淨寫可供
御一笑と奉存候以上

註 1 七月六日。

謹白、可い秋は、あまに
同く今堂は、為成り所を
被取入し、さうぞ、飲陣の
由瓜とて、乃ちあふ、
船回し、念言し、毎来共
同。多分、了却し、忙し甚だ
仕當時より、得る道に入
有違ひ、此の事、以て歎け
辭す。屏字おれし、有
哉、今の來、好も快活、何
が悲し、丁度、そ、願
う、之を、い、要中、を、飲
政より、これ角、ゆゑ、柔に
ゆる中、是、如し、臥枕、は、

とけりし未だぬきぬき
凍ねとては雪の
一糸とては

203

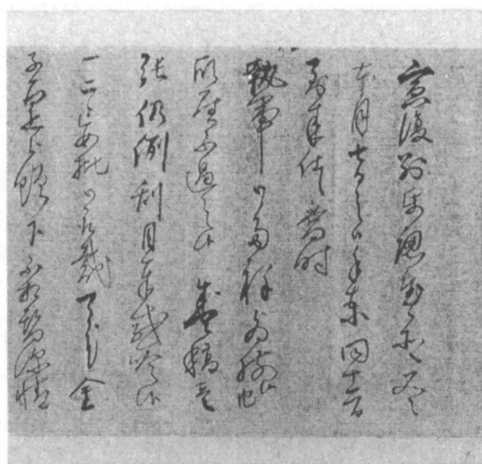
註1 『剣南詩藁』八十五卷。宋、陸游撰。

2 野村藤陰。大垣藩儒。龍之助は通称。嘉永三年大坂で後

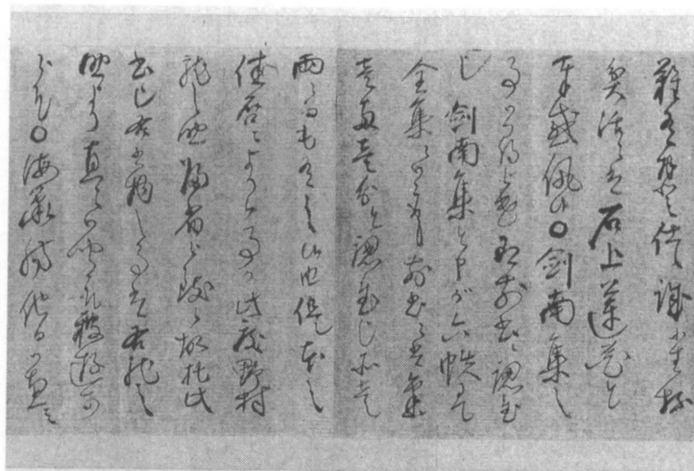
藤松陰の門に入り、翌四年津藩の齋藤拙堂に学ぶ。安政元

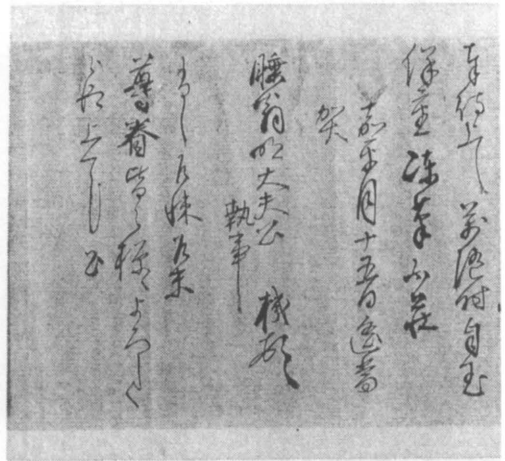
年帰藩し、藩校敬教堂の講官となる。文政十年一月生、明

治三十二年三月十五日没、七十三歳。



(172×748mm)





拝復寒氣日加候得共御多様被成御入候由奉遙賀候扱尊畫
三張御恵ミ被下難有拝登仕候乍不存近來別し而御升進之
様覺へ刮目申候永襲可仕候高槻へ之壱封早速飛脚所へ為
持遣し申候尊稿篇々感吟仕候一二妄批御取舎可被下候又
々御面倒之至御座候得とも藤城山人へ之一書御轉達被下

候様奉煩上候是は順便之節に而よろしく候令姪元齡君²
も乍憚宜敷御傳へ可被下候

高槻藤井強哉³ 嵩介寄鯉魚賦此代面謝

曾讀庭訓帖 真羨酒川 鯉羹 今日故人貽 始知六々羹

豉是尾張椒朝倉 碗面如珠浮脂肪 縦不龍門作甘雨

亦向寒儒潤枯腸

結二句一作

聞說此魚龍門去 興雲降雨救旱荒 今年久霖不須尔

好向寒儒潤枯腸

右貴地諸君御聚首之節御評隲被下候様奉希上候餘以時自

愛不乙

十一月初五日

機拌

細香閨秀⁵ 梧下

註1 村瀬藤城。儒者。名裝、字士錦、通称敬治、平治郎。美濃の人。頼山陽門。寛政二年生、嘉永六年九月三日没、六

十三歳。

十三歳。

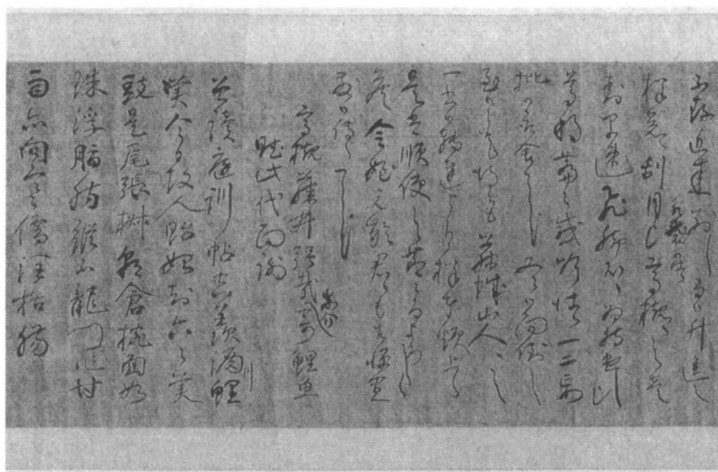
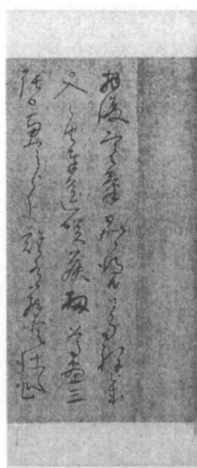
2 江馬元齡。蘭方医。名圭、字秋齡、号金粟、黄雨楼。頼

山陽門。江馬細香の甥。文化九年七月五日生、明治十五年
一月五日没、七十一歳。

3 藤井竹外。儒者。名啓、字士開・強哉、通称啓次郎・吉
郎。摂津高槻の人。頼山陽門。文化四年四月二十日生、慶
応二年七月二十一日没、六十歳。

4 尾張の味噌と、但馬朝倉の山椒。

5 江馬細香。詩人。名多保、号湘夢。美濃大垣藩侍医江馬
蘭斎の二女。頼山陽門。初め僧玉藻、後浦上春琴に画を学
ぶ。天明七年四月四日生、文久元年九月四日没、七十五歳。



(162×598mm)

結句一作
 古語此句能つて其意
 深む故早荒々耳久
 秋の涼尔好向を儒道
 枯腸
 古々地流るる寂寥しく夜
 月海渡るる静寂あそび
 海目さく乞
 十ノ初五
 機軸
 細書國秀格六
 小